

聾学校高等部から大学基礎教育課程への移行に関する調査研究

障害者高等教育研究支援センター

佐藤正幸

要旨：本研究は、聾学校高等部教育課程での国語、英語、数学における教育内容および到達の状況について訪問調査を行い、大学基礎教育課程への移行についての考察を行った。その結果、いずれの教科においても問題を解釈するリテラシーの力が必要であること、担当教員相互の指導内容に関する情報交換が必要であることが課題として出された。

キーワード：聾学校高等部、教育課程、到達状況

1. 目的

本学に入学してくる聾学校出身学生間における基礎学力(特に国語、英語、数学)の変動が著しい傾向がみられる。また、入学後はそれぞれの教科において、同学年において同一レベルの教育課程を行うことが極めて困難な状況である。そのような現状を鑑み、聴覚障害学生を受け入れる本学としては、それぞれの基礎学力に応じた基礎教育課程の再検討が急務の課題となってきた。

そこで、本研究では聾学校高等部における教育課程について教育内容(国語、英語、数学を中心に)、それに伴う学習到達状況等に関する現状について訪問調査を行った。その結果を受けて、基礎教育課程に移行にあたって検討すべきことについて考察を行った。

2. 方法

聾学校高等部における英語、国語、数学について本学学生出身校の聾学校高等部を中心に8校の聾学校を訪問し、その担当者に面接調査を行った。その調査内容は以下の3項目であった。

- ・ 高等部における国語、英語、数学各教科の教科指導内容、到達状況
- ・ 各教科において生徒が苦勞している点、躓き
- ・ その躓きを克服するための指導方法

調査は、筆者が各教科担当教員に、調査的面接法の1つである半構造化面接法(註1)で質問する方法で行った。その際、高等部主事にオブザーバーとして出席してもらった。

3. 高等学校学習指導要領(文部省告示)にみられる各教科の教育内容

調査に先だっの基礎資料として、一般の高等学校の学

習指導要領における各教科の教育内容について調べた。

まず、国語において高等学校3年間で学習する科目は、国語総合及び国語表現Ⅰが標準であるが、その他選択科目として国語表現Ⅱ、現代文、古典、古典講読が加わる。一般的には、1年次に国語総合、国語表現Ⅰ、2年次に現代文、古典、3年次に文系について現代文にその他の選択科目を履修するという例が挙げられる。

数学については、数学基礎、数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ、数学A、数学B及び数学Cとなっている。それぞれの科目における履修内容は次の通りになっている。

○数学基礎

数学と人間の活動
社会生活における数理的な考察
身近な統計

○数学Ⅰ

方程式と不等式(実数、式の展開と因数分解、一次不等式、二次方程式)
二次関数(二次関数とそのグラフ、値の変化、二次関数の最大・最小二次不等式)
図形と計算(三角比、三角比と図形)

○数学Ⅱ

式と証明・高次方程式(整式の除法、分散式、等式と不等式の証明、高次方程式)
図形と方程式(点と直線、円、)
いろいろな関数(三角関数、指数関数と対数関数)
微分・積分の考え

○数学Ⅲ

極限(数列の極限、関数とその極限)

微分法

積分法

○数学A

平面図形

集合と論理

場合の数と確率

○数学 B

数列

ベクトル

統計とコンピュータ

数値計算とコンピュータ

○数学 C

行列（行列とその演算、行列の積と逆行列）

行列の応用（連立一次方程式、点の移動）

式と曲線（二次曲線、媒介変数表示と極座標）

確率分布（確率の計算、確率分布）

統計処理（正規分布、統計的な推測）

高等学校において一般的に、数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲの順に履修することを原則としている。また、数学 A については数学基礎または数学Ⅰと並行させて履修するか、これらの科目を履修したあとに履修する、数学 B については数学Ⅰを履修したあとに履修する、さらに数学 C については数学Ⅰ及び数学 A を履修したあとに履修することを原則としている。

最後に英語は、オーラルコミュニケーションⅠ、オーラルコミュニケーションⅡ、英語Ⅰ、英語Ⅱ、リーディング、ライティングの科目があり、基本的にはⅠ、Ⅱの順に履修する。リーディング、ライティングは原則としてオーラルコミュニケーションⅠまたは英語Ⅰのいずれかを履修した後に履修する。

4. 結果

国語、数学、英語における調査結果を表1から3に示す。

1) 国語

○指導内容・到達状況

今回、調査を行った聾学校について、ほとんどが高等部3年間を国語総合に費やしている。一部では国語表現Ⅰ、現代文までいく学校もある一方で、センター入試国語の試験範囲である古文・漢文までは履修しきれない状況がみられた。また、実際に国語総合の中には、古文・漢文が含まれているが、現代の文章の項目だけに時間がとられてしまう傾向がみられた。一方では本学がセンター入試を取り入れたことにより希望する生徒には個別に古文・漢文の指導をしているという聾学校もみられた。

○生徒が苦労している点・躓き

全体的に、自分の考えをまとめて表現する力が弱いという回答がみられた。また、文章を作成するにあたって、語彙力が弱い、自分の体験の範囲内から抜け出させることが

できず、抽象的な思考など類推を働かせることが難しいことがみられ、その原因として社会的背景の少なさが挙げられていた。読みにおいて、説明文については意味を理解できていないというは見られないが、物語の文章については行間における登場人物などの気持ちの変化を読み取ることができないこと、何故このような言葉が出てくるのかが理解できていないということがみられた。

漢字については読む力が弱いという回答がみられたが、一部の聾学校では漢字検定の合格を目標に力を入れているところもみられた。

○躓きを克服するための指導方法

躓きについて主に読む力が元になっていることから、まず様々な文章を読んでどのように考えるかを体験させ、それを自分でまとめるという機会を多く持たせているという回答がみられた。文章としては、できるだけ身近な話題をテーマ（例えば新聞など）にしたものを選んでいくようであった。この国語における読解は、あらゆる教科（例えば数学における文章題の理解など）に繋がる点が多いので、それだけに読む・理解する・自分の考えをまとめて表現するという活動に時間をかけていることが窺える。

2) 数学

○指導内容・到達状況

今回、調査した聾学校において高等部が普通科、職業科があるため、指導内容、到達状況も様々である。数Ⅰまでがほとんどで、順調にいった数学 A までという状況であった。すなわち、前述の学習指導要領からみれば方程式と不等式（実数、式の展開と因数分解、一次不等式、二次方程式）、二次関数（二次関数とそのグラフ、値の変化、二次関数の最大・最小 二次不等式）、図形と計算（三角比、三角比と図形）、平面図形、集合と論理、場合の数と確率という範囲となる。また、数学Ⅰの6割までいくのが限度という回答もあった。

○生徒が苦労している点・躓き

まず、XYZの意味がわからず二次関数で躓いているケースがみられた。一方では、因数分解、二次方程式はわかるものの、文章題については問題文の意味が理解できず、苦労していることがみられた。これは、数学というよりもそれ以前の問題で国語の読みの問題に関わってくる。さらには、「X軸となす角度」の「なす」のように数学で使われている表現の意味が理解できないこともみられた。

○躓きを克服するための指導方法

まず、問題の意味を理解させることに重点を置き、その理解を促進するための図などに工夫を凝らしている。そのことに関しては国語の力そのものから見直すため、説明の

し方など国語科の担当教員と相談しながら進めているようである。その上で、この問題を解くにあたって適切な方程式を探しながら、式を考える練習をさせている。

3) 英語

○指導内容・到達状況

英語の到達状況についての回答は英語の科目で答えるよりも、英語検定の級で回答してきた。今回調査を行った聾学校では、英語検定4級または3級までが限度と答えるケースが多かった、中には高校2年程度の準2級もいたが、ごく少数である。

○生徒が苦勞している点・躓き

全体的に長文の英文解釈に苦勞している点が見られた。また、短い文章を利用した基本的な文法事項が理解できるが、長い文章において特に関係代名詞が加わった場合、理解できない場合が多い。さらには、英文解釈の中でよく見受けられる文章の置き換え（例えば、動名詞を不定詞に置き換えるなど）が難しい。

○躓きを克服するための指導方法

辞書を引くことを苦手とする生徒が多いため、わからなかったら辞書を引くという習慣を身につけさせるようにしている。その辞書についても電子辞書ではなく、本の辞書を推奨している。辞書の引き方については、単語の意味について最初に書いてある意味を使うのではなく、どれが適切な訳に繋がる意味なのかを探すことに時間をかけて指導している。

英文解釈についてもその時の社会事情に合わせて生徒の興味関心に応じて精選している。

5. 考 察

1) 教科学習における到達状況の差

今回調査した国語、数学、英語とも生徒間における到達状況、学力の差はかなり著しい傾向が見られた。このことについて担当者との話にも出てきたが、この差は、特に聾学校中学部から進学してきた生徒と通常の中学校から戻る形で進学してきた生徒間で顕著であり、中学校時代を含めこれまでの生徒の学習環境によることが大きいものと考えられる。

また、人事異動などで担当者の変更が著しい現状があり、そのため聾学校高等部教員の専門性が向上せず、かつ定着していないことも挙げられた。このことも生徒の到達状況が安定していない原因の1つと考える。

2) 躓きの原因

今回調査を進める中で、国語、数学、英語の3教科において様々な躓きの形が出された。国語は文章を読んでま

めることができない、数学は文章題が理解できない、英語は長文解釈が難しいというように出されたが、全体的に生徒それぞれの言語力によるところが大きいと思われる。そのような背景で、ある聾学校ではリテラシーの学習に時間をかけ、それを他の学習（英語、社会、理解、数学など）に繋がるように指導している様子が見られた。すなわち、国語の授業であっても理科、科学に関する説明文を取り上げるか、時事的な話題を材料として取り上げるかということである。

それぞれの教科について考えてみると、数学について文章題はもとより、数学で使われる表現（例えば「X軸となす角度」、「 $y=2X$ に平行な直線」）の理解が困難であることが見受けられ、この文章表現に対応した図を用いながら、この文章表現の意味の理解に繋げる必要がある。

英語においては、長文解釈について辞書の引き方で苦勞していることも原因の1つとして考えられる。すなわち、辞書に掲載されている単語の意味について、多数ある中の最初の単語の意味に固執してしまい、訳す際に文章が構成できず、生徒の中に苦勞意識が生じてしまう。また、英語の文章が長くなればなるほど、関係代名詞が入るなどして文章の構造が複雑となりこのことも躓きの原因として考えられる。

さらに、国語において通常ならば1年程度で終わる国語総合が3年かかるという点では、生徒それぞれの学力という問題だけではなく教科書通りに進めなければならないのかと言うことが考えられる。すなわち、国語については物語文、説明文というように独立している場合が多いので、最初からというよりも生徒の興味関心、わかりやすい単元から始めるのが効果的である。順番に進めていって苦手なところにつづいた時、その単元学習に時間がかかってしまうので、それだけ履修年数が増えてしまうことと思われる。

3) 大学基礎教育課程への移行において検討すべきこと

まず、到達状況に関連した学力の差については、すでに基礎教育実践部門（聴覚系）では一部始められているが、個別の補習体制が必要となってくる。そのためには、それぞれの学生について入学時点での学力を把握する必要があると考える。特に、センター入試に転向した今、それぞれの学生の基礎学力が明確にみえなくなってしまうという懸念がある。

さらに、聾学校（聴覚特別支援学校）高等部の担当教員の中にも自身の指導における力量について不安であるという声も聴かれた。現在、公開講座で国語、数学、英語に関する講義の中でも取り上げられているが、状況によって

は聾学校高等部における教科指導法を中心としたワークショップ、情報交換会などの場を設ける必要があると考える。

今回、本調査研究にご協力下さいました聾学校の先生方に厚く御礼申し上げます。本調査研究は平成18年度障害者高等教育研究支援センター長裁量経費の助成を受けました。

文 献

- [1] 高橋純一・渡辺文夫・大淵憲一：人間科学研究法ハンドブック。ナカニシヤ出版，1998
- 2) 文部省：高等学校学習指導要領。ぎょうせい，1999

註

- 1：半構造化面接法：面接者（筆者）と被面接者（聾学校

高等部主事及び担当教員）の役割関係は固定されているが、同時にインフォーマルな姿勢で親しみ易い関係になるようにする。そのために場所も対象者が落ち着けるようなプライベートな場がよく選択される。基本的には、質問すべき事項があらかじめ設定されている場合が多い。しかし、これは詳細までは設定していないので、状況に応じた自然な形で行うことができる。参考までに、構造化面接法とは、面接者と被面接者が面接する目的、質問の内容、順番などが厳密にきめられており、面接者の言葉遣いまでも厳しくきめられている。また、場所も面接室とフォーマルな場所に限定されている。一方、非構造化面接法とは、構造化面接ほどの役割規定はなく、一般に自由応答式質問で、自然な相互関係を重視し、被面接者に応じて指示や質問の仕方、順番を変更することもあり得る。場所も半構造化面接法と同じく、プライベートな場所が用意される（高橋・渡部・大淵，1998）

Transition from the Curriculum of the Senior High School for the Deaf to a General University Education

SATO Masayuki

Research and Support Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired

Abstract: In this study, we examined the educational contents and achievements of Japanese language, English language and mathematics in a senior high school for the deaf, and discuss the transition to a general university education. Thereafter, we consider the necessity of literacy in understanding exercises in each subject and the necessity of exchanging teaching ideas among teachers.

Keyword: Senior high school for the deaf, Curriculum, Achievement

